

縄文人になろう Part1～土器作りにチャレンジ～ Part2～野焼きにチャレンジ～

1, 趣 旨

土器作り・野焼き体験を通し、道南圏域における縄文文化について学び、地域活動やまちづくりに関する意識の高揚を図る。

2, 期 日

Part1（土器作り）平成 26 年 7 月 27 日（日）【日帰り】

Part2（野焼き）平成 26 年 8 月 10 日（日）【日帰り】

3, 共催・実施場所

オニウシ縄文会

北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森

4, 参加対象

どなたでも 50 名

5, 参加実績

①31 名（幼児 1 小学生 6 成人 24）

②30 名（幼児 1 小学生 11 高校生 1 成人 17）

6, プログラム内容

	9	10	11	12	13	14	15
7/27 (日)	受付開始9:00～	受付 開 会 式	土器作りに挑戦！	昼 食	土器作りに挑戦！	※作り終わった方から、随時解散になります。	
8/10 (日)	受付開始9:00～	受付 開 会 式	野焼き体験に挑戦！ & 縄文食を食べてみよう！		※活動が終わり次第解散となります。		



7, 活動の様子

7月27日、ネイパル森にて共催事業「縄文人になろう PART1～土器作りにチャレンジ～」が実施された。参加者 31 名は、講師である磯尾先生とオニウシ縄文会の方にアドバイスを貰いながら、土器づくり挑戦し、思い思いの縄文土器を作りあげた。

集中して物事に取組み、自由に創作するのがとても楽しかったという声や、縄文人の知恵・文化に感動したとの声があがった。

8月10日には、「縄文人になろう PART2～野焼き体験にチャレンジ～」が実施され、自分たちが作成した土器を野焼きする体験を行った。また、昼食には古代米や、どんぐりの粉で作ったどんぐりクッキーを縄文土器で煮焼きをした古代食を食べた。

土器作りから野焼きまでを体験して、参加者は縄文人がどのように器を作り、食していたのかを知り、食べるまでの苦労や、土器で調理ができることに感動したとの声が多くあがった。また、「現代の食品のおいしさに感謝」という声もあがった。縄文人になろうに参加して改めて現代の食のおいしさを感じた方もいた。参加者は自分で作りあげた世界にひとつだけのオリジナル土器を大切に持ち帰り解散となった。



8, 参加者の声

(以下アンケートより抜粋)

- ・縄文人はこのような器を作り、古代米を食していたのかとタイムスリップしたように感じた。
- ・縄文人はグルメだったんだ！土器で料理ができることに感動した。
- ・器の大きさ、大変な作業、素敵なデザインと驚くことばかりでした。

- ・集中して物事に取り組む時の楽しさを改めて感じました。日常でこれほど集中することは、なかなかないので良い経験をさせていただきました。

9、事業の分析と考察

本事業の趣旨が「土器作り・土器の野焼き体験を通し、道南圏域における縄文文化について学び、地域活動やまちづくりに関する意識の高揚を図る。」である。土器作り・野焼き体験を通して参加者からは、「縄文人になったつもりで、楽しんで作りました。土に親しんだのは10何年ぶりでした。また是非やってみたいです!」「子ども(3才)が楽しめるのか不安もありましたが、長時間集中して取り組む姿に成長を感じました。子どもにとって自由な創作体験が大切であると改めて感じました。」との、集中して物事に取組み、自由に創作するのがとても楽しかったという声や、「縄文人はこのように器を作り、古代米を食していたのかとタイムスリップしたように感じられました。」「縄文食は食べるまでが苦勞です。」「縄文人はグルメだったんだ!」との土器作りから野焼きまでを体験して、参加者は縄文人がどのように器を作り、食していたのかを知り、食べるまでの苦勞や、土器で調理ができることに感動したとの声が多数あがった。また、「現代の食品のおいしさに感謝」という声もあがった。縄文人になろうに参加して改めて現代の食のおいしさを感じた方もいたことから、縄文文化に対する学びを深められたのではないかと感じる。また、「今後もネイパル森の事業に参加したい」とアンケートに答えて頂いた全員から頂いた。その理由には、「ここに引っ越してきて4年になります。もっともっと赤井川あるいは森町に溶け込みたいからです。」「楽しい活動を様々な人と出会い学ぶことができるからです。」「日常から離れて、新しい物事に取り組むチャンスをいただけるので。」等のネイパル森の事業に参加することで、人との出会いや新しい取組にチャレンジする楽しさを感じてもらおうとともに、地域活動等に関する意識を高めるきっかけとなったのではないと思う。



一方、定員50名のところ31名の参加となった本事業だが、「この事業を知ったきっかけはなんですか?」という質問に対し、ほとんどの方が「人から聞いて」と答えた。「チラシを見て・HPを見て」と答えた方は各1名であった。広報の仕方は、渡島・檜山管内の小中学校に各4枚チラシを送付。その他に講師である磯尾先生が知人にチラシを配布、新聞(北海道新聞・読売新聞・函館新聞)での広報であった。来年度、よりたくさんの方に縄文文化を通じ、物づくりの楽しさや、地域の方々との交流の楽しさを味わってもらうためには、広報の仕方を工夫しなくてはならないと考える。

10、成果と課題



○成果

- ・土器作りから野焼きまでを体験して、縄文文化に対する学びを深められた。
- ・事業に参加することで、人との出会いや新しい取組にチャレンジする楽しさを感じてもらおうとともに、地域活動等に関する意識を高めるきっかけとなった

▼課題

- ・広報の仕方を工夫しなくてはならない